

【論文】

明治初年における森有礼とスミソニアン・インスティテューションとの 交流：西洋の博物館受容過程

Arinori MORI and the Smithsonian Institution in the Early Meiji Era:
the Japanese Reception of Western Museums

財部香枝*
Kae TAKARABE

Abstract: Analyzing the old correspondences between the Smithsonian Institution and the related Japanese, which are included in the incoming- and outgoing-letters of the Office of the Secretary in the Smithsonian Institution Archives, the author discusses activities of Minister Arinori MORI in Washington, D.C. and his potential role in the Japanese history of museums, to which former studies seem to have paid little attention. The author also refers to the relationship between the Institution and the Japan's Legation after his leaving Washington, D.C.

1. 序論

日本の博物館概念の形成や、博物館創設に与った先駆的人物としては、町田久成、田中芳男、佐野常民、田中不二麿、手嶋精一、九鬼隆一らが挙げられる。彼らは、幕末・明治初年に、使節団として、あるいは海外留学生として、西洋で博物館を実見する機会を得て、その経験が彼らの博物館構想に影響を与えたとされる。たとえば町田久成・手嶋精一は英国の大英博物館を、佐野常民は英国のサウス・ケンジントン博物館を、また田中芳男はフランスのジャルダン・デ・プラントを念頭に置いていたという（東京国立博物館編 1973、国立科学博物館編 1977）。これまで博物館史研究では、これら先駆的人物の博物館構想がその主題となってきた。

そのような中、筆者は、博物館草創期におけるア

メリカの博物館の影響を主題として取り上げ、博物館史において正当に位置づける必要があると考え、これまでに万延元（1860）年遣米使節団、岩倉使節団（1872年）によるスミソニアン・インスティテューション（Smithsonian Institution）およびその博物館視察を探究してきた（財部 1998、1999、2002、Takarabe 2000）。その探究過程において、わが国の西洋の博物館受容研究では、幕末・維新期の各使節団や留学生の博物館・博覧会の見聞・体験などが主題となっており、結果として共時的分析が中心であったが、今後は、長期的視点で西洋の博物館受容過程を捉え直す必要を指摘した（財部 2002：41-2）。また、博物館史研究では、西洋の博物館が日本に及ぼした影響ばかりが注目される傾向にあったが、「日本が西洋の博物館に及ぼした影響」を示唆する事例

* 中部大学中部高等学術研究所研究員

平成15年1月15日受理

を挙げ、「今後は、日本が西洋の博物館を受容した側面ばかりではなく、西洋の博物館との相互作用、さらに言えば西洋の博物館の活動展開との関連も考慮していく必要」も指摘した(財部 2002:42)。

このような点を踏まえ、本稿では、これまでの筆者の研究に引き続き、スミソニアン・インスティテューションを取り上げ、同インスティテューションおよびその博物館と日本の博物館との相互作用を通時的に探究し、博物館草創期における諸相を明らかにすることを目的とする。具体的には、同インスティテューションと日本公使館(在ワシントン)の森有礼との交流に焦点を定めるが、森有礼帰国後の日本公使(館)との交流にも敷衍する。

日本の博物館草創期におけるスミソニアン・インスティテューションとの関連については、従来の博物館史において次の2つの事項が明らかになっていた。一つは、万延元年遣米使節団によって視察が行われた同インスティテューションは、日本人がはじめて公式に実見した西洋の博物館であったということである。筆者は、上にふれたように、同使節団によるスミソニアン・インスティテューションおよびその博物館の視察を主題として取り上げ、従来の研究で、あいまいであった受容した博物館の実態を国外史料を用いて解明した(財部 1998、1999、Takarabe 2000)。さらに筆者は、従来の研究で看過されてきた、岩倉使節団による同インスティテューション視察も主題として取り上げ、これも国外史料を用いて考察を試みた(財部 2002)。

日本の博物館草創期におけるもう一つのスミソニアン・インスティテューションとの関連は、次のように指摘されている。教育博物館開館後の国外からの寄贈資料は、公共施設の中では博物館からの寄贈が件数、点数ともに最多であった。その中でスミソニアン・インスティテューションが首位を占めていた。1880(明治13)年、同インスティテューションからアルコール漬魚類184点を、翌1881(明治14)年には魚類212点を、翌1882(明治15)年以降は図書を贈付された(椎名 1988:78)。

文部省を経由してスミソニアン博物館と鳥類、魚類、鉱物などの資料の交換は、1878(明治11)年から始まった(国立科学博物館編 1977:96)。同年、教育博物館本館物品掛の職員門井保定は植物採集の

ために秩父辺に、波江元吉は動植物採集のために大阪、和歌山へそれぞれ出張した。この出張は、スミソニアン博物館へ交換資料として送るため、文部省から委託されたものであった。このときの採集品は本館で調製され、翌年4月7日に文部省へ引き渡されたことが、1879(明治12)年の『教育博物館年報』に次のように記録されている。「曾て文部省ノ命ヲ受ケ蒐集セシ米國スミソニヤン博物館等へ贈付セラルヘキ本邦鑛石魚類等整頓セシニヨリ四月七日ヲ以テ之ヲ同省ニ廻送ス」(国立科学博物館編 1977:111)。

上記のように、教育博物館は、スミソニアン・インスティテューションとは他国の博物館に先駆けて標本交換を始めたが、その過程の詳細は明らかにされてきていない。

筆者は1999年7-8月にスミソニアン・インスティテューション・アーカイブス(SIA)でOffice of the Secretary of the Incoming Correspondence(Record Unit 26, 52)およびOutgoing Correspondence(Record Unit 33)ファイル(同インスティテューション初代長官ジョセフ・ヘンリー(Joseph Henry)、副長官で後の第2代長官スペンサー・F・ベアード(Spencer F. Baird))の中に含まれる日本関係者との間に授受された書簡を、1865年から1887(明治20)年までの約20年間分調査した。その日本関係者は、以下のように類型化することができる。

在ワシントン

日本公使館(森有礼など)

在日本

文部省(学監デヴィッド・マレー、田中不二磨など)

御雇外国人(開拓使顧問ホーレス・ケブロンなど)

アメリカ留学経験者

フィラデルフィア万国博覧会委員会

本稿では、スミソニアン・インスティテューションの年報などの出版物のほか、このSIA所蔵の書簡を用いる。

なお、ジョセフ・ヘンリー文書の出版状況について敷衍しておきたい。文書は、オールバニー時代(1797-1832)、プリンストン時代(1832-1846)、スミソニアン・インスティテューション時代(1846-

1878)、と3部に分けて出版されてきており、このうちオールバニー、プリンストン時代の文書は出版が終了し、スミソニアン・インスティテューション時代のものは1857年12月まで出版をみている (Rothenberg, eds. 2002)。

2. 森有礼とスミソニアン・インスティテューションとの交流(1): 先行研究から

森有礼が、イギリスおよびアメリカ留学の経験を有し、明治初期において外交・政治・教育などの各面で新政府の枢要な地位を歴任し、後世の思想に多大な影響を与えた人物であることは、周知のとおりである。

森有礼に関する研究は、政治、教育など多様な視点から数多くの研究がこれまでなされてきている。『森有礼全集1-3』(大久保編 1972abc)は、森の人物、思想、業績を網羅的に示すものであり、森有礼研究の依拠すべき基本文献と言える。1巻には公的な文書類、2巻には紀行・日記や書簡などの私的な文書類のほか、森に関する伝記資料、評論等の参考文献類が収められている。3巻には *Education in Japan* など森の英文編著や海門山人による最初の伝記『森有礼』が覆刻収録されているほか、日本公使館 *Japanese Legation Letter Copybook (1872-1873)* が所収されている。これは、日本代理公使としてワシントンに駐在した最後の半年間に、森がアメリカの各界に宛てた公文書の写しである。

『森有礼全集1-3』は、新資料を含めて『新修森有礼全集』(大久保監修 1997-)として覆刻されている。初版では一部しか掲載されなかった森の著作 *Life and Resources in America* が、覆刻版では全文掲載されている。本橋 (1986: 101) は、森のアメリカ研究、とりわけ、その政治制度、文化・教育制度の研究が、後の森の公的生活に多いに資することとなったと評価する。そのような観点から、この全文掲載によって、森有礼研究のさらなる進展が期待される。

森有礼を主題とする、いわゆる人物研究においては、スミソニアン・インスティテューション初代長官ジョセフ・ヘンリーと森との間に親交があったことが明らかにされている。

Lanman (1872: 50-3) は、後述する下関事件賠償金との関連で森有礼とヘンリーの関係を紹介した。

この他にも、Lanmanは森の簡単な伝記を残している (1883: 135-7)。日本では、海門による最初の伝記『森有礼』に森とヘンリーの関係が取り上げられ、森がワシントンで公使を務めた時に「交りし人々は皆當時米國第一流の人物」であったとし、その中に「教授デヨセフ、ヘンリー」を挙げているほか、森の刀がスミソニアン・インスティテューションの博物館[ママ; 軍事博物館]に保管された経緯も記されている (海門 1897: 33-4)。森の伝記は、その後、木村 (1899)、大久保 (1944)、Hall (1973)、犬塚 (1986) まで、数多く書かれてきている。

森有礼は、1885 (明治18) 年内閣制度の創設によって、文部省御用掛から初代文部大臣に就任した。椎名 (1988: 322-3) は、森を博物館史において次のように評価する。

森の教育政策は、国家の発展繁栄のために教育の果たす役割を重要視し、小学校・中学校・帝国大学という三段階の学校制度、師範学校制度を改編し、学校を種別に整備するという、教育政策史上注目すべき役割を果たしている。しかし、森文相の教育政策上の主眼は、基本的な学校制度の整備におかれたことと、折からの深刻な財政難に対処しなければならなかったために、社会教育施設に対してはきわめて消極的であり、博物館や図書館は、それが絶対に必要であるという考えをもたなかった。

このような評価もあって、博物館史においては、森と博物館との関連についてはほとんど着目されてこなかったし、また、スミソニアン・インスティテューションとの関連を論じる論考も管見の限り見られない。

こうした中、小倉 (1985) は、図書館史に主眼を置きながらも、森有礼と博物館について論じ、「青・壮年時代の半数を欧米で過ごし、とくに米国に在っては、多くの著名な識者によって、図書館・博物館についても、十分に学び得る環境のもとに置かれ」とし (小倉 1985: 40)、さらに、スミソニアン・インスティテューションにも敷衍し、「スミソニアン研究所のような大規模の博物館、そして「廃刀論を唱える森が日本刀を寄託した」軍事博物館のごとき専門博物館の双方について、その詳細な知識を得る環境と機会にもまた十分恵まれていた」と再評価し

ている（小倉 1985：29）。

以下では、上述の伝記や『森有禮全集』、個別論文などによってすでに明らかにされている森有礼とスミソニアン・インスティテューションとの関係を整理しておきたい。

1) 知識人への窓口

森は1870年10月5日少弁務使に任じられ、米国在勤を命じられ、12月27日サンフランシスコに着き、翌年1871年1月12日にワシントンに到着した。森有礼は、その後、小弁務使、中弁務使、代理公使を歴任したが、その間、新聞のインタビューに応じたり、米国議会の外交委員会、予算委員会に出席して日本の政治についての講演をしたり、その活躍は多彩であった。このような森の成功の一つは、いち早く上流知識人を味方につけたからとされる。当時の森には、「恩人」とも言うべき2人のアメリカ人がいた。国務長官ハミルトン・フィッシュ（Hamilton Fish）とジョセフ・ヘンリーである。フィッシュは近代外交のこつを教え、ヘンリーはアメリカの知識人への窓口になった（大久保編 1972c：解説6）。逆に、ヘンリーが日本についてかなり詳しい知識を持っていたのも、森との長い交際の結果であったとされる（大久保編 1972c：解説21）。

森の文化外交にとって不可欠な役割を果たしたのはチャールズ・ランマン（Charles Lanman）である。彼は、ヘンリーの推薦で1871年9月から1872年8月までの間、森の秘書を務めた。彼は、岩倉使節団の受入れや、津田梅子の世話などにも携わった。森とランマンとの間には、なんらかの軋轢があり、一年間の契約の終了後、ランマンは解雇された。その際、ヘンリーが慰めの手紙を送っている。なお、ランマンは後に1876年から1882年まで吉田清成公使の秘書も務めた（大久保編 1972c：解説6-8）。

2) 下関事件賠償金

1863（文久3）年5月10日、朝廷の攘夷政策を実行しようとして長州藩は下関海峡を通過するアメリカの商船とフランス、オランダの軍艦を砲撃した。翌年、イギリス、アメリカ、フランス、オランダの四国連合艦隊は報復として下関を砲撃し、一時砲台を占領した。その後、徳川幕府は連合国側と条約を

結び、下関事件賠償金の支払いを約束した。この時、アメリカの受け取るようになった賠償額（75万ドル）はアメリカ船の受けた被害に比べて不当に高額であった。

鶴飼（1998）は、駐米日本公使館のロビー活動に焦点を当てながら、下関事件賠償金返還の過程を論じた。彼は、外務省外交史料館所蔵のランマンによる報告書を用いて、同賠償金返還過程を次のとおり明らかにした。賠償金は国庫に収められず「下関賠償金基金」となったが、フィッシュが森に同基金を日本に返還すべきと語り、森がランマンにその対処を尋ねた。その時、森は、「専ら教育目的に注ぐか、東京に一大図書館を創設すべきと提案するつもりである」と述べた。ランマンは、提案はアメリカ市民に正しく知らされねばならないので、スミソニアン博物館のヘンリーに事を始めてもらうのが適当であると意見を述べたという。それを受け、森からヘンリーを訪ねるように命じられたランマンは、提案の詳細をヘンリーに説明した。ヘンリーの提案で、ランマンは議会図書館の合同委員会宛の書簡を作成した。ヘンリーは、その書簡内容を修正・拡大し、自分で署名した後、委員会に宛てて送付したという。

ヘンリーのこの提案を受け取った委員会は、好意的態度を示し、さらに大統領や国務長官も心からの協力を約束した。この結果、1883年2月、下院は下関事件賠償金残額の支払免除を議決することになる（犬塚 1986：143）。なお、ヘンリー提案に示された森の構想については後述する。

3) 教育論

森は、岩倉使節の一行が到着する3週間ほど前の2月3日、アメリカの各界の有識者15人に宛てて、教育に関する個人的な質問状を送付し、その回答を求めている。その回答者の一人がヘンリーであり、彼はその中で日本人の発展には科学が不可欠であると説いた。これらの回答は整理・編集され、*Education in Japan*として1873年1月に出版されている。これは、前述したとおり、『森有禮全集3』（大久保編 1972c）に再掲されている。なお、ヘンリーの回答の訳文については、尾形（1963：352-6）を参照してほしい。

4) 日本語廃止論

森有礼が日本語廃止論を唱えたことは周知であるが、森は、その問題に関してもヘンリーとだいたい話し合ったとされる。森は、後にエール大学言語学教授ウィリアム・ホイットニー (William Whitney) に意見を求める際に、ヘンリーを介して書簡を送っている。なお、ヘンリーは、ホイットニーに添状を書く際、彼に森宛に平信の返事を出して、ヘンリー自身に直接にそして内密に雇い入れの問題について答えるように頼んでいる。このため、ホイットニーの雇用を考え出したのは、森ではなくて、ヘンリーであったとされる (大久保編 1972a: 解説97)。

5) 学問、学会への関心喚起

ヘンリーは森に西洋の「近代科学の新しい世界観や学術研究についての新しい考え方」を与えたとされる (Hall 1973: 172)。たとえばヘンリーは、森編集の *Life and Resources in America* の中の *Literary, Artistic and Scientific Life* の章の校正をしたり、訂正を加えたりしている (大久保編 1972a: 解説97)。同書は、経験的な技術、偶然発見された事実、科学のない発明に基づく文明の例として日本と中国を挙げ、西洋の科学を導入する必要を説いている。また、スミソニアン・インスティテューションやジョセフ・ヘンリーにも言及され、日本において同様のインスティテューションが創設される必要も記されている。

ヘンリーは、日本の将来のために、自然科学ばかりでなく、経済学の必要性も説いた。同時に、彼は長老派教会の活発な教徒であり、道徳教育の重要性から純粹キリスト教を採用すべき点についても、森の注意を喚起しようとした (大久保編 1972c: 解説21)。

森有礼の駐米中、ヘンリーはスミソニアン・インスティテューション長官であったばかりでなく、ワシントン哲学協会 (Philosophical Society of Washington) 会長、全米科学アカデミー (National Academy of Science) 会長でもあった。ヘンリーはまた、米国科学振興協会 (American Association for the Advancement of Science) の創立者で元会長でもあった。また、ホイットニーは、米国言語学会 (American Philological Association) 会長であり、ランマンは全米デザイン協会 (National Academy of

Design) の会員であった。森が現代的な学問や科学の世界に興味を持ったのはヘンリーの影響であったとされているが、森が学会に関心を持って明六社を創立したのも、ヘンリーを初めとする学識者の影響もあったであろう (Hall 1973: 235)。

上述したほかにも、ヘンリーは教育上、母親の役割が重要である点を指摘しているところから、ペリンチーフ (Perinchief) とともに、後の森の「妻妾論」にも影響を与えたとされている (大久保編 1972c: 解説21)。

3. 森有礼とスミソニアン・インスティテューションとの交流(2): 書簡分析から

ヘンリーと森との間で交わされた書簡については、前にふれたように、森著 *Education in Japan* に、森の教育に関する質問状へのヘンリーの回答が収められている。また、上述したように、1872年1月10日にヘンリーが議会図書館合同委員会に提出した下関事件賠償金償還に関する書類は Lanman (1872) に収められている。さらに、森が日本代理公使としてワシントンに駐在した最後の半年間の書簡集 *Japanese Legation Letter Copybook (1872-1873)* にも、ヘンリーからの手紙が含まれている。上述の3点は、『森有礼全集3』 (大久保編 1972c: 348-56、68-9、100) にそれぞれ所収されている。中川 (1984: 15) は、森有礼研究が「英国、米国、清国に滞在乃至駐在中の外地資料については殆ど未開拓」であるとした上で、新たにアメリカで発掘した史料を紹介するが、森とヘンリーとの関係についての新知見はみられない。これらの点を考慮すると、SIA所蔵の書簡は、全てが揃っているわけではなく完全とは言えないが、ワシントン滞在中の森とヘンリーおよびスミソニアン・インスティテューションとの関係解明に役立つと言えよう。以下では、書簡 (資料1) を用いて、森有礼とスミソニアン・インスティテューションとの関連を整理・分析していきたい。

1) ヘンリーとの関係構築

前にふれたように、森は少弁務使として米国在勤を命じられ、1871年1月12日にワシントンに到着した。森とヘンリーの親交は、森が最初にワシントンに着いた時から始まったとされる。二人の最初の出

会いは、日米間における気象学などの技術交流に関する会議であった可能性が示唆されているが（大久保編 1972c：解説6）、それを裏付ける史料はSIAには残っていない。1871年7月14日のヘンリーのデスクダイアリー（SIA、JHP）には、次のように記録されている。

日本大使〔森〕を訪ねた。以前と同様、非常に知的であり、彼の国の状態を改良することを熱望していた。土地はよく耕されている。人口過剰。輸入食料。輸出物、茶と絹。

また、SIAに残っているヘンリーと森との間で交わされた最初の手紙は、1871年7月18日付のヘンリーから森宛のものであり、開拓使顧問ホーレス・ケプロン（Horace Capron）の注文品の勘定書きがスミソニアン・インスティテューションに送られてきており、それを日本公使館に転送するという内容であった。森とヘンリーとの最初の出会いがいつだったかは、不明であるが、このように1871年7月には両者の間に交流が見られる。上述したとおり、ヘンリーは後に森の「恩人」とも言うべき存在となっていくが（大久保編 1972c：解説6）、森がヘンリーをいかに信頼し、助言を求めていたかは、教育に関する質問状への回答を促す際に、ヘンリーを「日本の人々の教育や幸福に関して、日本の本当のニーズをあなたは十分にわかっておられる」（1872. 3. 2）と評価する森の言葉から明らかである。

このような親交は、森有礼がワシントンを離れるまで、変わらず続いた。森はロンドン経由で帰国したが、ヘンリーは、森がロンドンで本を買う時に適切な値段で対応するように出版者ウェズリー（Wesley）に依頼する手紙を彼に持たせた（1873. 3. 17）。また、森有礼はハーバート・スペンサー（Herbert Spencer）に関心を持っていたが、ヘンリーは面識のないスペンサーに森の紹介状を書き、森に持たせている（1873. 3. 17）。これらから、ヘンリーは、アメリカを離れた後の森についても細やかな配慮を怠らなかったことがわかる。

2) ヘンリーの文明観、科学観、日本観

筆者はこれまでに、ヘンリーが万延元年遣米使節団、岩倉使節団に多大なる関心を示していたことを示した（財部 2002：40-1）。また、1871年のスミソ

ニアン・インスティテューションの年報の中で、彼は「インスティテューションは西洋文明の採用に関して日本の歴史的な動きに大きな関心を寄せてきた」と表明しており、西洋文明の拡大普及という点から彼が日本に関心を持ち続けていたことは明らかである（Henry 1873a：36）。

スミソニアン・インスティテューションは、「人類の知識の増進と普及」を目的として設立された。ヘンリーは、知識の「普及」よりも「増進」の方がスミソニアン・インスティテューションの使命として重要であると考え、知識の「増進」はオリジナルな科学研究によって推進され、知識の「普及」は学術出版によって国内外で遂行されうるとした。これに対し、既得の知識を保管する博物館は知識の「増進」には繋がらないし、博物館の知識の「普及」はワシントン近郊の人々に限定されると考えた（Moyer 1997：249-52、Rivinus & Youssef 1992：57）。すなわちヘンリーは、国内のみならず国外までも視野に入れて、知識の増進・普及を考えていた。

ヘンリーは、上述のような使命を持つ、スミソニアン・インスティテューション長官として、また、一流の科学者として、日本が西洋科学を採用し、「ヨーロッパ文明の水準まで貴国〔日本〕を引き上げる」（1872. 3. 4）ことを望んだ。このような言葉から、ヘンリーが西洋文明が日本の文明より優れていると考えていたことは明白である。しかし、それは人種的なバイアスからというよりもむしろ科学研究の体系的過程に欠けるという視点に立っての発言のように思われる。ヘンリーは、西洋文明は、まさに科学が根底となっているとの見解を持ち、西洋諸国と肩を並べるほどの国家となるためには西洋科学の導入が急務であると考えていた。しかしヘンリーは、日本が西洋科学を全般的に導入するのは不可能だとも考えた。なぜなら長い年月を経た日本民族の考え方を急に变えるのは困難であるからであり、結果として日本はゆっくり進歩すると結論づけている（1872. 3. 4）。

菊池（1981：56）は、森有礼を日本の文明化をめざした国家主義者であり、その国家主義とは国際社会においての日本の独立の危機感からくるものであったと言う。森有礼の文明観について、留学期に続いてアメリカでの外交官生活においても、「文明」の

獲得が思想的課題の一つになっていたとの指摘もある(中野目 1986: 84)。森の文明観には、ヘンリーの文明観も大きく影響を与えたと推察されるが、森のものは、独立の危機感からか、ヘンリーのものより急進的であったように思われる。

3) 教科書見本送付

1871年のスミソニアン・インスティテューションの年報によると、森有礼のために、日本委員会の調査用の教育関係出版物を、合衆国の主要な教科書出版社に対して寄贈するよう求めたりもした(Henry 1873a: 37)。

書簡によって、教科書見本が実際に送られたことがわかる(1872. 2. 28、1872. 3. 3)。

4) 標本授受

1871年のスミソニアン・インスティテューションの年報によると、同インスティテューションは1871年に同所の出版物一揃えを江戸[ママ]の大学に贈った(Henry 1873a: 37)。

これに関する経緯であるが、出版物を寄贈したいという申し出がまずヘンリーからなされ、森がそれを受け入れる形をとっている。受け入れの返報として、森は日本の出版物[ママ]のコレクションを作成して、アメリカ政府に渡したいと答えた(1871. 12. 29)。ヘンリーは、日本の出版物のためにアメリカの一流出版社の仲介をするという返事を書いた(1872. 1. 3)。それに対して森は感謝の意を表し(1872. 1. 9)、ヘンリーは森から本を受け取った(1872. 1. 16)。なお、ヘンリーは森の要望どおり、ニューヨークの出版者パトナム(Putnum)氏を紹介している(1872. 1. 22)。

また、同年報には、日本の気象観測データ、考古学・博物学の標本を日本から入手するための準備も行ったと記されている(Henry 1873a: 37)。この標本入手には、上に示したようなヘンリーと森有礼との関係が背景にあったのである。

1872年のスミソニアン・インスティテューションの年報のコレクション追加リストによると、森有礼が日本の金貨・銀貨セットおよび日本の人類学標本を寄贈している(Henry 1873b: 59)。森からヘンリーへの金貨・銀貨の送り状(1872. 9. 23)は、日本公

使館の*Japanese Legation Letter Copybook* (1872-1873)に所収されている(大久保編 1972c: 100)。

この人類学標本は、書簡から、4月20日に寄贈されたことがわかる。森のヘンリー宛書簡(1872. 4. 25)によると、この人類学標本は、当時の江戸[ママ]の地図、9世紀以前の都に建てられた政府建造物[平城京大極殿]の平面図、石や金属製の矢尻、石斧、石の遺物であった(1872. 5. 3)。

森の帰国前夜、ヘンリーは日本に対して科学的協力を惜しまないこと、一方、標本収集の重要性を説いた上で、考古学標本、博物学標本、気象データなどの入手に協力してほしいことを改めて伝えている(1873. 3. 17)。

5) ヘンリーの助力要請

森は、エール大学の言語学教授ウィリアム・ホイットニー(William Whitney)宛の書簡の中で、日本語に代えて英語を国語にしようとする私案を示し、意見を求めた。その際、日本の教育、言語教育の関心を高めようとする森の努力に対するヘンリーの理解に感謝し、教授へ手紙を渡してほしいと依頼すると同時に、ヘンリーの意見も添えるように頼んだ(1872. 5. 21)。このように、ヘンリーがホイットニーとの仲介役を果たしていることは明らかである。

6) 御雇外国人

前述のとおり、開拓使顧問ケプロンの注文品に対する数学器具メーカーの勘定書きがスミソニアン・インスティテューションに送られてきており、それを日本公使館に転送するという手紙(1871. 7. 18)によって、ケプロンの機器購入の仲立ちをヘンリーがしていたことがわかる。

またヘンリーは、ケプロンのもと開拓使で働く人物の推薦を依頼されたり(1872. 6. 8)、ジョン・C・ランドルフ(John C. Randolph、後の開拓使学校教師)の紹介状を森宛に書いたりしている(1872. 9. 28)。

このような開拓使との関わりは、ケプロンが日本に渡る前からの彼とヘンリーとの間の友好関係が背景にあった。

4. 日本公使(館)とスミソニアン・インスティテューションとの交流: 書簡分析から

ワシントンの日本公使(館)とスミソニアン・インスティテューションとの間にも多くの書簡が残っており、以下ではトピックごとに整理・分析していきたい(資料2, 3)。

1) 御雇外国人

(1) 御雇外国人の調査・推薦

森の後任の公使も、日本の御雇外国人の推薦をスミソニアン・インスティテューションに依頼している(1873. 12. 29)。1878年にヘンリーが亡くなった後も、それまで副長官でありヘンリーに代わって長官となったベアードに、候補者推薦や人物調査を依頼している。その際、「公式に交渉するのはデリケートな問題があるので、彼の意向を非公式に確認してほしい」(1878. 8. 5)という言葉から、ベアードに代わった後も御雇外国人招聘に際し、同インスティテューションは日本公使館から絶大な信頼を寄せられていたことがわかる。ベアードは後に、同インスティテューションの国立博物館の織物担当学芸員ロミン・ヒッチコック(Romyn Hitchcock)を御雇外国人として推薦するために、彼が英語だけでなく、顕微鏡にも知悉しているという紹介状を日本公使・九鬼に書いている(1886. 3. 12)。

(2) 御雇外国人依頼の科学的調査

日本公使館はスミソニアン・インスティテューションに、開拓使から送られてきたラッコの毛皮標本の博物学的調査(博物学的特徴、毛皮の価値、売却の最良の市場、毛皮の取り方や保存の適切な方法)を依頼している(1875. 12. 2)。ベンジャミン・S・ライマン(Benjamin S. Lyman)の収集物(砂だらけのアイヌのものを含む)を同インスティテューションに転送しているが、これもおそらくは調査の依頼だったのであろう(1876. 2. 23)。ケプロンとヘンリーとの交友から、開拓使は同インスティテューションに科学的調査を依頼することが多く、それは日本公使館を通じて行われた。逆にベアードも、日本公使館を通じてケプロンに調査を依頼することもあった(1878. 10. 28)。

(3) 機器購入・支払媒介

スミソニアン・インスティテューションは、日本公使館と協力して、日本向け科学機械、科学器具の購入を行った(1874. 5. 18)。また、開拓使関係の手形決済を同インスティテューションを通じて行ったりもした(1875. 2. 8)。

2) 科学的調査の依頼・照会

日本公使館は、スミソニアン・インスティテューションに科学的な照会を随時行っている。たとえば、「歯を持つクジラの変種はいるか」という問い合わせをしたり(1873. 8. 19)、藍の分析を依頼したり(1875. 9. 8)、鮭の缶詰製造の情報を知らせるように依頼したりした(1879. 6. 4)。逆に、ベアードも日本公使館に、日本の魚類について照会したり、英訳を依頼したりした(1878. 12. 7)。また、日本から40冊程の本を受け取った際に、日本公使館員を呼んで、本の題名などの調査を依頼している(1883. 1. 24)。

3) アメリカ社会との窓口

日本公使館は、議会法によって日本政府に割り当てられた公式書類〔詳細不明〕の送付をスミソニアン・インスティテューションに依頼したり(1875. 11. 9)、日本の文部省のためにある書類を同インスティテューションが入手できるかどうかと問い合わせをしたりしている(1883. 5. 9)。このように日本公使館は、同インスティテューションを、科学関連にとどまらず、政治なども含めた広い意味でのアメリカ社会の窓口とみなしている。

5. 結論

1) 森有礼の博物館観

本稿では、書簡を通時的に分析して、森有礼とスミソニアン・インスティテューション、さらには日本公使館と同所との関係を明らかにした。森とヘンリーとの交友関係はアメリカの知識階級、権力者の間でもよく知られており、たとえば、ある教授がヘンリーに対し、自分の学生を日本で就職させるために森に推薦するよう頼んだり(1872. 12. 15)、日本での自らの職を得るために森に進言してくれるようヘンリーに頼む人もいたほどであった(1873. 4. 14)。

このようなヘンリーとの親密な関係が、森の博物館観形成にどのような影響をもたらしたのかを検討してみたい。

前にふれたように、下関賠償金基金を日本の教育費用として返還するという1872年1月のヘンリーの提案は、フィッシュの発案を森が具体化させたものであり、内容をランマンが起草、ヘンリーが拡大・修正したものであった。そこに織り込まれた森の具体案とは、「最も重要なもの〔プラン〕は、教育上の目的のために、西ヨーロッパ諸国や合衆国の科学、文学を象徴するような図書館、および生活の実用性のみならず、あらゆる理論科学の原理を十分に説明することができる標本、器具、模型などを備えた国立機関〔a National Institution〕を江戸〔Jeddo〕に設立すること」であり、「この機関はできる限り急速に英語を国中に普及させる目的の師範学校の役割も兼ねた巨大な中央大学〔a great central university〕たるべきもの」とされた。また、森は、賠償金の約3分の1をもって日本の主要都市にいくつかの教育のための建物を建て、教授や補助教員を合衆国から招聘したいという考えも抱いていた（Lanman 1872: 51-3; 大久保編 1972c: 68-9に再掲）。

このプランは、後の森の帝国大学令につながる森の総合大学構想の端緒とされる（犬塚 1986: 141-3）。古賀（1993: 71）は、「a National Institution」を「国立機関（博物館）」と、また「this Institution」を「この機関（図書館・博物館）」と訳注を付した上で、「その機関の性格から考えて、スミソニアン博物館教授であったヘンリーの影響を強く受けていた」と論じる。また小倉（1985: 36）は、「図書館・博物館を中核とした大規模な国立中央大学でもあり、英語教育を重視した師範教育をそれに付属したまことに膨大な構想から成り、スミソニアン協会のもを念頭におき、それに範をとったとしても、さらにそれを上回るもの」と述べる。

このような構想を森が抱くようになったのは、序論でふれたように、「青・壮年時代の半数を欧米ですごし、とくに米国に在っては、多くの著名な有識者によって、図書館・博物館についても、十分に学び得る環境のもとに置かれ、それに触発されて」のことであったかもしれない（小倉 1985: 40）。小倉はまた、森が、「スミソニアン研究所のような大規模の

博物館、そして〔廃刀論を唱える森が日本刀を寄託した〕軍事博物館のごとき専門博物館の双方について、その詳細な知識を得る環境と機会にもまた十分恵まれていた」とも指摘する（小倉 1985: 29）。

往復書簡やヘンリーのデスク・ダイアリーから、森とヘンリーが互いのオフィスを行き来していたことが判明している。森がワシントンに駐在した当時、スミソニアン・インスティテューションは、まさに博物館機能が拡大している時であり、スミソニアン・インスティテューション・ビルディングの大部分がコレクションの展示にあてられていた（詳細は財部 2002参照）。小倉が指摘するとおり、確かに森は、ヘンリー訪問の際にコレクションが展示された博物館を視察する機会を得たであろう。また、上述の書簡分析で見えてきたように、森は標本・図書の授受、科学機器購入などの実際の博物館活動にも与った。

このように、ヘンリーとの親交をとおして、森はスミソニアン・インスティテューションおよび博物館を理解していったが、そのヘンリーの印象がゆえに、同所を標本が展示されている「博物館」としてというより、むしろ、学術研究を推進し、その成果を出版物にしていくような「研究機関」としての側面に注目したと考えられる。すなわち、ヘンリーは一流の物理学者であり、森は彼から自然科学の重要性などを含めて多くを学び、西洋の「近代科学の新しい世界観や学術研究についての新しい考え方」を得た（Hall 1973: 172）。

ヘンリーの影響は、森の著作*Life and Resources in America*のLiterary, Artistic and Scientific Lifeの章の中に見て取れるが、そこでは、経験的な技術、偶然発見された事実、科学のない発明に基づく文明の例として日本と中国を挙げ、西洋の科学を導入する必要を説いている。また、アメリカでは、純粋科学よりも応用科学に強い関心を持たれているが、純粋科学発展のための機関として、スミソニアン・インスティテューションおよびジョセフ・ヘンリーが挙げられている。ここに、森によるヘンリーおよび同所の理解が明白に表れていると言えるだろう。そして、それゆえ日本にもそのような研究機関が必要であると考えようになったと思われる。ヘンリーはまた、数々の学会の会長職も務めており、森は学会の必要もヘンリーから学び取った。結果として、

帰国後の明六社結成へと繋がっていったのであろう。

2) 博物館史における森有礼の再評価

森は、博物館史では、社会教育施設に対してきわめて消極的であり、博物館や図書館は、それが絶対に必要であるという考えをもたなかったとの評価を受けている(椎名 1988:322-3)。しかしながら、外交面において、スミソニアン・インスティテューションのヘンリーとの関係を構築し、コレクション収集が急務であった日本の博物館草創期において日米間の図書・標本授受の道を拓いた点は再評価すべきであろう。このような友好関係があったがために、明治初年において他国の博物館に先駆けてスミソニアン・インスティテューションとの標本交換が可能となったのではないだろうか。森とヘンリーのようなパーソナル・コネクションは、これまであまり注目されてこなかったが、博物館草創期においては、そのような関係こそが日米友好関係の構築に大きく与り、標本授受を円滑に進めていく上で重要な役割を果たしたと考えられる。

さらに、森が構築したヘンリー、スミソニアン・インスティテューションとの友好関係が、後の日本公使(館)に引き継がれた点も見逃すべきではないだろう。日本公使(館)とスミソニアン・インスティテューションの間の友好関係は、御雇外国人招聘などの交渉をスムーズに進める基盤となった。この友好関係は、日本側のみならず、同インスティテューション側にとっても比較的気軽に物事を依頼することを可能にするものであり、双方向の交流であったことに注意を喚起しておきたい。

明治初年の「博物館思想と、それに由来する政策は、もはや個人の経験をベースに単独で形成されたというよりもむしろ、時代の思潮なかんづく時の政府首脳に共有された経験との相互作用の中で形成された」と見た方が妥当(岩本 2000:34)という指摘が近年なされるようになった。そのような観点から、明治初年に、森有礼、日本公使(館)がスミソニアン・インスティテューションと関わりを持ち、標本・図書の授受、科学機器購入などの実際の博物館活動に与ったことは、留意すべきであろう。すなわち、これまで、博物館受容研究においては、文教政策、博物館政策に与った人々のみが注目され、実際に博

物館活動に携わる人々による博物館の受容という視点は抜け落ちてきた。このような受容もまた、日本の博物館思想が形成されていく一過程として再評価する必要があるだろう。

謝 辞

本誌の匿名の査読者の指摘によって改稿を行った。有益な指摘に感謝したい。

文 献

- Hall, Ivan Parker 1973 *Mori Arinori* Harvard University Press
- Henry, Joseph 1873a "Report of the Secretary" *Annual Report of Smithsonian Institution, 1871*, Smithsonian Institution: 13-41
- Henry, Joseph 1873b "Report of the Secretary" *Annual Report of Smithsonian Institution, 1872*, Smithsonian Institution: 13-52
- 犬塚孝明 1986『森有礼』吉川弘文館
- 岩本陽二 2000「木戸孝允の米欧における博物館理解の形成」『博物館学雑誌』第26巻第1号:23-36
- 海門山人 1897『森有禮』民友社(『森有禮全集3』1972cに所収)
- 菊池美智子 1981「教育史における森有礼の評価」『教育学雑誌』15:48-57
- 木村匡 1899『森先生伝』金港堂書籍
- 古賀徹 1993「下関償金対日返還運動における「教育費」充当論:日米教育交流史の一断面」『日本の教育史学』36:66-79
- 国立科学博物館編 1977『国立科学博物館百年史』国立科学博物館
- Lanman, Charles 1872 *The Japanese in America* Longmans, Green, Reader, and Dyer (『森有禮全集3』1972cに所収)
- Lanman, Charles 1883 *Leading Men of Japan* D. Lothrop
- 本橋正 1986「森有礼とそのアメリカ研究」『学習院大学法学部研究年報』21:51-102
- Moyer, Albert E. 1997 *Joseph Henry: The Rise of an American Scientist* Smithsonian Institution Press

- 中川隆 1984 「在米ワシントン初代公使森有礼の活動について」『亜細亜大学教養部紀要』30：1-17
- 中野目徹 1986 「森有礼の文明観：明治初年代における「文明」の課題」『日本歴史』456：75-90
- 尾形裕康 1963 『学制実施経緯の研究』校倉書房
- 小倉親雄 1985 「森有礼の文政と図書館」『ノートルダム女子大学研究紀要』15：15-52
- 大久保利謙 1944 『森有礼』文教書院
- 大久保利謙編 1972a 『森有礼全集1』宣文堂書店
- 大久保利謙編 1972b 『森有礼全集2』宣文堂書店
- 大久保利謙編 1972c 『森有礼全集3』宣文堂書店
- 大久保利謙監修 1997- 『新修森有礼全集』文泉堂書店
- Rivinus, E. F. and E. M. Youssef 1992 *Spencer Baird of the Smithsonian* Smithsonian Institution Press
- Rothenberg, Marc (eds.) 2002 *Papers of Joseph Henry (January 1854-December 1857) : The Smithsonian Years* vol.9 Science History Publications
- 椎名仙卓 1988 『日本博物館発達史』雄山閣出版
- 財部香枝 1998 「幕末における西洋博物館の受容：万延元年（1860年）遣米使節団が実見した博物館」名古屋大学情報文化学部・名古屋大学大学院人間情報学研究科研究紀要『情報文化研究』第8号：161-79
- 財部香枝 1999 「幕末における西洋自然史博物館の受容：万延元年（1860年）遣米使節団とスミソニアン・インスティテューション」『博物館学雑誌』第24巻第2号：63-79
- 財部香枝 2002 「1872年の岩倉使節団によるスミソニアン・インスティテューション視察：明治初年における西洋の自然史博物館受容過程」『博物館学雑誌』第28巻第1号：25-44
- Takarabe, Kae 2000 "Samurai at the Smithsonian: First Japanese Visitors to Western Museum in the U.S." Ghiselin, Michael T. and Alan E. Leviton, eds. *Cultures and Institutions of Natural History: Essays in the History and Philosophy of Science* California Academy of Sciences: 161-82
- 東京国立博物館編 1973 『東京国立博物館百年史』東京国立博物館
- 鶴飼政志 1998 「米国の下関賠償金返還：駐米日本公使館のロビー活動」『人民の歴史学』135：22-34

資料1 森有礼とスミソニアン・インスティテューションとの間の書簡授受一覧

(資料中の【森→ス】、【ス→森】は書簡の宛先を示す。()内は差出人・受取人の名)

- 【ス (ヘンリー)→森】ニューヨークの数学器具メーカー、グリーン (Green) 氏による当インスティテューション宛の勘定書を同封する。日本委員会のケブロン将軍 (General Capron) が注文した器具である。ケブロン将軍配下の委員会の一人アンティセル博士 (Dr. Antisell) が選んだ器具は、信頼性があり、価格も道理にかなっていると思われる。私の見解では、グリーン氏は我が国では器具製作において秀逸である (1871. 7. 18)。
- 【森→ス (ヘンリー)】もし貴所の規定に合うならば、スミソニアン・インスティテューションの科学的出版物全セットを江戸 [ママ] の国立図書館に喜んで受け入れたい。その交換として、アメリカ政府が受け入れられるような日本の出版物のコレクションも作りたい (1871. 12. 29)。
- 【ス (ヘンリー)→森】江戸 [ママ] の国立図書館にスミソニアンの出版物全セットを送りたい、また、いくつかのシリーズの追加が出版された時にも同図書館に送るという我々の申し出に対するあなたの29日付の返事に感謝する。ご要望どおり、貴政府の便に供するような著作を出版するため、合衆国の一流の出版社に問い合わせる (1872. 1. 3)。
- 【森→ス (ヘンリー)】今月3日付の手紙とともに、価値あるスミソニアン出版物コレクションを有難く受領した。ご好意に心から感謝する。一流出版社の寄付の仲介をするというお約束を当政府は感謝する (1872. 1. 9)。
- 【ス (ヘンリー)→森】興味深い贈り物、お礼申し上げる。……本を喜んで調査し、近代文明を示す物として友人に見せる…… (1872. 1. 16)。
- 【ス (ヘンリー)→森】本状の持参人ニューヨークのパトナム (Putnum) 氏 [出版者] を紹介したい。彼とは長年の付き合いがあり、有能な紳士である (1872. 1. 22)。
- 【ス (ヘンリー)→森】ワシントンのヘンリー・シャーマン (Henry Sherman) 氏からの手紙を同封する。シャーマン氏は同市の法曹界の一員であり、彼の仕事は人々に評価されている (1872. 1. 31)。
- 【森→ス (ヘンリー)】省略 [教育に関する質問状; 大久保編 1972c : 271-2、附録翻訳1-2を参照] (1872. 2. 3)。
- 【森→ス (ヘンリー)】合衆国中の様々な人々に宛てた手紙の写しを同封する。同じ問題についてあなたの関心を引いているところであるが、最高権威から意見を聞きたい点が1、2あるので、あなたの好意に訴える。我が国の人々が高い文明を持たねばならないと確信した上で、最初の問題となるのが「幸福を追求するために最善、最適かつ最短の道は何か?」ということであろう。とりわけあなたの助言を求めたいのがこの問題である。加えて、西洋諸国がいかにして現状に至ることができたのかについてもお願いする。何かお借りできるものがあれば利用したい (1872. 2. 18)。
- 【ス (ヘンリー)→森】我が国で出版された教科書のいくつかのシリーズの見本がスミソニアン・インスティテューションの依頼によって寄贈されたが、それらを同封の送り状に記された様々な施設を代表して贈らせていただきたい (1872. 2. 28)。
- 【森→ス (ヘンリー)】ウールセイ (Woolsey) 教授の論文を同封する。しかし、約束されたあなたの論文にとりわけ関心を持ってお待ちしている。なぜなら、日本の人々の教育や幸福に関して、日本の本当のニーズをあなたは十分にわかっておられるからである (1872. 3. 2)。
- 【ス (ヘンリー)→森】ボストンのトムプソン、ビゲロー & ブラウン (Thompson Bigelow & Brown) から多数の教科書を受け取ったことをお知らせする。当インスティテューションによってすでにお手元に届けられた同様のコレクションに加えるべく、これを同封する。今回の寄贈の送り状を同封することも付け加える (1872. 3. 3)。
- 【ス (ヘンリー)→森】省略 [教育に関する質問状への回答; 大久保編 1972c : 348-56、尾形 1963 : 352-6を参照] (1872. 3. 4)。
- 【ス (ヘンリー)→森】私の知人である本状の持参人……嬢を紹介させていただきたい。彼女は、道徳的で資質に恵まれた尊敬すべき女性である。先の戦争で……、現在はニューメキシコの内科医であるお兄さんを頼っている。彼女はお兄さんが……を得ることについてあなたに相談することを望んでいる。ご配慮をお願いしたい (1872. 3. 17)。
- 【ス (ヘンリー)→森】当インスティテューションの依頼であなた方に贈られたアメリカの教科書の見本のいくつかの荷物に関して当インスティテューションが支払った税金19.05の勘定書を同封させていただきたい。ご都合の良い時に当該金額を送金していただきたい (1872. 3. 27)。
- 【ス (ヘアード)→森】……著作の完全なリストを載せたカタログを英国から受け取ったので、あなたに送る (1872. 4. 6)。
- 【ス (ヘンリー)→森】当インスティテューションを代表して、4月20日付の手紙を受け取ったこと、および列举された標本を贈っていただいたことに謝意を表明する。これらは、同様のものとともに配置し、物のラベルと次の議会への報告書 [年報] に謝辞を示す (1872. 5. 2)。
- 【森→ス (ヘンリー)】日本からの地図および先史遺物 (1872. 5. 3)。
- 【森→ス (ヘンリー)】日本の幸福と関係する問題への変わらぬご支援感謝している。我が国の政府も同様の感情を抱いている。あなたは、日本の教育、とりわけ言語教育の関心を高めようとする私の努力を励ましてくださるので、エール大学のホイットニー (W. D. Whitney) 教授宛の手紙を同封する。重要な問題であるので、あなたから彼に

手紙を渡していただきたい。ざっと目を通していただき、あなたの賛同が得られれば、その問題に関するあなた御自身の意見を添えてくださるとありがたい。それを必要と思わなければこのような重要なステップをとらなかつたであろうこと、また、日本の人々への任務と同様に、一般的に文明化への欠くことのできない任務であろうことは言うまでもない (1872. 5. 21)。

【森→ス】蝦夷島でケブロンの下で働く人々の任命について、大鳥大将と私があなたに最近話した件について、もし考えるお時間があれば、照会したい。個人的にあなたに申し上げたことを繰り返す。探しているアシスタントは次のとおり：アンティセル博士の後任1、鉱山学校教師1、機械学教師1、内科医、外科医1-2 (1872. 6. 8)。

【森 (ランマン)→ス (ヘンリー)】スミソニアン・インスティテューションから当公使館に送られた多くの本の中で、アメリカン・インスティテュートに関する9冊を発見した。明らかに誤送なので、返送する (1872. 6. 18)。

【森→ス (ヘンリー)】今月8日付の手紙を受け取った。あなたが助言をとおしてご支援くださることを感謝している。ライマン氏に関してあなたがおっしゃたことを勘案すると、彼は該当の役職に適うように思う。相互情報として、保証は次のとおり：給与は年間7000ドル。日本までの旅費および奉職中の公用の国内旅費を全額支給、日本滞在中の住居の提供。これらの条件をライマン氏が認めるならば、政府にその情報を伝えるために、なるべく早くそれがわかるとうれしい (1872. 7. 12)。

【ス (ヘンリー)→[森]】日本における言語の進歩の問題に関するエール大学ホイットニー教授からの手紙を同封する。ホイットニー教授は我が国最初の言語学者の一人とされ、彼の学識は学者の間で際立っており、彼の実践を理解する人々全てに評価されている…… (1872. 7. 16)。

【森→ス (ヘンリー)】省略 [日本の新しい金貨・銀貨のセットをスミソニアン・インスティテューションの博物館に寄贈したい；大久保編 1972c：100を参照] (1872. 9. 23)。

【ス (ヤング)→森】23日付の手紙を受領した。今ヘンリー教授は町にはおらず、また、いつ戻るかもわからない。しかし、あなたが親切にもご提供くださる硬貨を、あなたのご都合のよろしい時に送っていただいて結構である (1872. 9. 25)。

【ス (ヘンリー)→森】本状の持参人ジョン・C・ランドルフ (John C. Randolph) 氏を紹介させていただきたい。彼は、ニューヨークのコロンビア大学鉱山学校の教員によって日本の大学の機械学の教授職の適任者として推薦されている (1872. 9. 28)。

【ス (ヘンリー)→森】ワシントンに戻る途中、9月23日付のあなたの手紙に気づいたため、日本の新しい金と銀の硬貨1セットを贈りたいとお申し出に、今、謝意を表したい。今週午後1時以降毎日オフィスにいる。ご都合のよい時に、お目にかかれるとうれしい (1872. 10. 2)。

【ス (ヘンリー)→森】私は、コロンビア大学科学学校の職員に、学生の中から日本で鉱山工学あるいは関係分野を教えるのに適した者を指名するよう依頼した。それにより、本状の持参人ヘンリー・ニュートン (Henry Newton) 氏が任命された。それゆえ、貴政府が雇用する教師の一人として彼が適任者であると推薦する (1873. 1. 18)。

【ス (ヘンリー)→森→不明】本状の持参人は、私の友人で合衆国に来ている日本の大臣森有礼氏である。彼は西洋文明における日本人の進歩という点で重要な問題に関する情報を集めるために、2、3週間ロンドンを訪れる。彼へのご配慮をお願いする (1873. 3. 17)。

【ス (ヘンリー)→森→ウェズリー (Wesley)】本状の持参人は、合衆国に来ている日本の大臣森有礼氏である。彼は日本に戻る前に2、3週間ロンドンを訪れる。本を購入する際に援助を必要とするかもしれないので、彼へのご配慮をお願いする。彼が望むものを妥当な値段で贈ること、および法外な値段を押し付ける人々からあなたが彼をまもるであろうことを森氏に申し出た。彼は日本を訪れた後、おそらく合衆国に戻るだろう。……森氏が聡明で尊敬すべき紳士であることがわかるだろう…… (1873. 3. 17)。

【ス (ヘンリー)→森→スペンサー】あなたを個人的に存じ上げているわけではないが、スミソニアン・インスティテューション長官として、私の友人で合衆国に来ている日本の大臣森有礼氏を紹介させていただきたい。彼はあなたの著作を読んであなたを尊敬している。彼はあなたと知り合いになり、あなたに日本人の文明化に関心を持っていただき、ご教示を得ることを望んでいる。彼へのご配慮をお願いする (1873. 3. 17)。

【ス (ヘンリー)→森】あなたが合衆国を出発する前夜、日本による当インスティテューションへの特別な関心事に関して、いくつかの提案を書く。それは、当機関と貴国の科学愛好家の間の有効な協力を促すであろう。我々の側では、科学の推進によって、貴政府や国民に当インスティテューションを通して我が国の力を喜んで奉仕する。1：貴国の最も古代の人々の遺物の標本を入手したい。たとえば土地を耕す際に発見される骨器や石器である。あるいは、天井から落ちてくる石灰岩が凝結した薄い殻に床が覆われた洞穴 [鍾乳洞] の中にある標本を入手したい。その殻を取り除くと、多様な動物の骨に混じって石斧、丸のみ、矢尻などの古代の遺物がしばしば発見される。今日、人類学者はそのような場所から出てくる道具や骨などの標本を入手することに大きな関心を寄せている。もし道具が発見されれば、洞穴を利用した初期の人々の存在を示唆するし、一方、骨の標本が比較解剖学的手法で研究されれば、同時期に生息していた動物も示すだろう。床を覆う殻の標本もまた、確保すべきである。なぜなら、その厚みは洞穴に最初に生息して以来の時の経過を示すからである。当インスティテューションには後の時代の日本の技芸の状態を示す多くの標本コレクションがすでにありますが、古い時代の標本が何か現存すれば、好ましい。2：気象

学に関して、天気に関する記録が望ましい。たとえば、通常の寒い冬や異常に暖かい冬の長い期間の間の水流の開始・終了時のようなものである。雨量計によって測量する雨量の正確な観測のような将来のための気象観測を確立することもまた重要である。雷雨の発生、雷雲が来る方向、放電の猛威のような稲妻の特性、被害の確認。雷に打たれた木や建物。気圧計、温度計による通常の観測。風向き。北方のオーロラの出現など。これらの観測を記録するために、空欄の用紙を1セットと我が国の観測者によって用いられる雨量計を送る。3：貴国の動物学、植物学、鉱物学、地質学を表す博物学標本もいただければうれしい。安全で順調な航海、および合衆国にすばやくお戻りになることを祈っている（1873.3.17）。

資料2 日本公使(館)とスミソニアン・インスティテューションとの間の書簡授受一覧

(資料中の【公→ス】、【ス→公】は書簡の宛先を示す。()内は差出人・受取人の名)

【公(ブラウン)→ス】ヘンリー教授に友好的論争に決着をつけていただきたい。菌を持つクジラの変種はいるか。お答えはご都合のよろしい時で結構である。【付記：ある。マッコウクジラには菌があり、事実、クジラ科の特定のものだけが菌がない。……クジラは胎児でさえ菌を持つ】(1873.8.19)。

【公(矢野)→ス(ヘンリー)】1872年6月8日に当公使館からあなたに転送した手紙の中で、あなたは日本で公務する候補者を挙げるように依頼された。その中には1-2名の内科医・外科医がいる。あなたがその職位を探す経緯について知らされていないので、その件の伝達に関する情報をいただければありがたい。その職位はケプロン將軍が雇われている省【開拓使】の予定である。その職位に関し、彼らはあなたに手紙を書いたと思う。政府からの最近の助言によって、私はあなたの行動に注目する必要がある。一方、公的な指示によって、問題の職位は無期限に延期されたとお知らせせねばならない(1873.12.29)。

【ス(ヘンリー)→公(矢野)】29日付の手紙を正しく受け取ったが、インスティテューションの理事会会合の準備に追われ、お知らせできなかった。しかし、科学・技術の指導者の候補を数名選んだことをお知らせする。その中には内科医はいない。あなたの手紙にこの任命が延期されるとあったので、日本での任務を私に申請する志願者にそのように知らせる(1874.1.20)。

【公(矢野)→ス(ヘンリー)】お手紙感謝する。日本の開拓使のための科学器具をロンドンで購入することに異存はないが、支払いの件を決定する前に、あなたから器具のリストを受領できればありがたい。そうすると、私が受け取った日本語のリストとそれを対照できるからである(1874.5.4)。

【ス(ヘンリー)→公(矢野)】B・スミス・ライマン氏が下記の器具を購入するよう依頼してきたことをお知らせする。2インチシルバー気圧計7、アネロイド気圧計7、雨量計7、風力計7、温度計7、自記(熱気)温度計7、自記(寒気)温度計7、湿度温度計7、クロノメーター【経度測定用の時計】7、ボケット・アネロイド2。これらの器具購入に対するライマン氏の見積もり金484では十分でないだろう(1874.5.18)。

【ス(ヘンリー)→公(矢野)】4箱の合衆国政府の書類を保有し、日本政府に送る準備ができていますことをお知らせする。どなたかをスミソニアンによこして、それを受け取るようにしていただきたい(1874.10.6)。

【ス→公(矢野)】当インスティテューションの責任のもと、日本向けの4箱の政府書類を保管しており、公使館から送ってほしいと最近お知らせした。貴国向け政府刊物の1箱が追加され、全部で5箱になることをお知らせする。どなたかにそれを取りに来させ、貴所で管理するよう再度お願いする(1874.10.30)。

【公(矢野)→ス(ヘンリー)】【本状の】持参人ジョン・マカーティ(John McCarty)は、あなたから知らされておりました5箱の合衆国政府の書類を受領することを私が認めた者である。なお、それらを当政府に移送する用意ができています(1874.11.2)。

【ス(ヘンリー)→公(矢野)】日本へ移送するよう言及した多くの本は、日本で組織された新しいドイツ協会宛である。同所は、ヨーロッパや本国の様々な機関と通信を始めた。それゆえその荷物を早いうちに日本へ送っていただきたい(1874.11.28)。

【ス(ヘンリー)→公(吉田)】3月25日付ベンジャミン・スミス・ライマンの手紙を昨年4月に受け取った。その手紙は、日本の開拓使のためにある器具を私に購入するよう求めてきたものであるが、写しを同封する。これらは日本公使館の同意を得て、すぐに注文した。昨年11月25日ロンドンから船便で蝦夷の開拓使長官黒田氏宛に送られた。……同封の写しで、日本までの運賃などを確認できる(1875.2.8)。

【公(吉田)→ス(ヘンリー)】今月8日付の手紙を正しく受領し、その情報に感謝している。その情報から、送り状に従って、その器具が注意深く包装され、正しく船積みされれば、その代金を遅延なくあなたに送金する(1875.2.10)。

【ス(ヘンリー)→公(吉田)】議会終了に伴う仕事の準備の直中であつたので、残念ながら、あなたの10日付の手紙を放置していた。しかしながら、今、器具の勘定の支払いに対するあなたのお申し出を受け入れ、勘定書きを受

け取る。その金が支払われるまで、保険として、品物のうちの1つがロンドンの代理人に保管される。ウィリアム・ウェズリー (William Wesley) 当ての273.18.8ポンドの為替手形を我々に送っていただきたい (1875.3.5)。

【公 (吉田)→ス (ヘンリー)】日本の開拓使のベンジャミン・S・ライマン氏によってあなたを介して注文された科学器具の全支払にかかる273.18.8ポンドのロンドンあての為替手形を同封する。手形は本国政府との連絡を単純化するため、あなたを受取人にして振り出した。あなたの受領書をいただければありがたい。この件に関してお手数をかけた。あなたのご好意の成果を当政府に連絡する。追伸：ロンドンからの送り状には船荷証券について何も書かれていないので、それは日本に転送されたと思われる (1875.3.10)。

【ス (ヘンリー)→公 (吉田)】日本の大臣、吉田清成から受領。開拓使宛に注文した気象器具のための全額支払いの273.18.8ポンドのI・カセロ (I. Casello) の為替手形は、スコットランド号に船積みされた (1875.3.11)。

【ス (ヘンリー)→公 (吉田)→】本状の持参人は、今月17日付のあなたの手紙で言及された森氏が置いていった磁器を受け取ることになっている。彼はその品物を注意深く荷造りし、運搬する (1875.6.18)。

【公 (矢野)→ス (ヘンリー)】同封の物をBessels博士に転送していただきたい。ご家族によりしく伝えていただきたい (1875.7.3)。

【ス (ヘンリー)→公 (吉田)】数日前あなたがヘンリー氏に書いたメモは無視されたのではない。貴国公使館員として乗船すべき適任者に関して照会して、ようやく我々の友人シェファール (Schaeffer) 博士が妥当な補償で応じる文学・科学に通じる若い紳士であり、乗船も近いことがわかった。シェファール博士は若い内科医であり、病理解剖学の研究を専門にし、ワシントンなどの内科医のために顕微鏡を使って腎臓の病気を調査している。彼は顕微鏡を用いる研究の専門家であり、……その利用を指導することができる。医者は姉妹たちと住んでいる…… (1875.7 (?).19)。

【ス (ヘンリー)→公 (吉田)】あなたから調査用に提出された藍のサンプルの分析結果をお知らせする。水分4.55%、灰16.89%、インディゴティン55.50%。灰は、砂、酸化鉄、アルミナ、石灰、鉍物の不純物などからなるが、インディゴティンの含有率は非常に高い。60%以上の最良の標本はめったにない (1875.9.8)。

【公 (吉田)→ス (ヘンリー)】今月4日付の回状に関連して、議会法によって当政府に割り当てられた公式書類を、送り状とともに、チャールズ・ランマンに配達していただきたい (1875.11.9)。

【ス (ヘンリー)→公 (吉田)】日本向けの政府書類保管に関する指示をはじめとする今月9日付のご好意に感謝する。それに従ってFをランマン氏に、残りのABCEDをそれぞれの宛先に送った (1875.11.11)。

【公 (吉田)→ス (ヘンリー)】ベアード教授が口頭で依頼なさったとおり、博物学者の調査のために同封のラッコの毛皮の標本をスミソニアン・インスティテューションに送付する。それは日本の開拓使から当公使館に送られてきたものである。ラッコの博物学的特徴と同様に毛皮の価値、売却の最良の市場、毛皮の取り方や保存の適切な方法に関する情報を含む報告書を、当政府に送るためにいただきたい (1875.12.2)。

【公 (ヘンリー)→ス (ヘンリー)】私共によって船積みされた荷物を郵送する。付随のリストに関するかぎりでは、砂だらけのアイヌ物を含む。東京のB・S・ライマン氏の依頼によって転送する (1876.2.23)。

【公 (吉田)→ス (ヘンリー)】ギョー (Guyot) 教授と妹 (姉) さんを明晩6時に食事にお招きした。彼らはいらっしゃると思う。あなたとご家族も一緒にできたら嬉しい (1876.5.4)。

【ス (ヘンリー)→公 (吉田)】4月20日付の手紙とともに当インスティテューション宛の贈り物に感謝する。当インスティテューションが担当する国立博物館へのご寄付を有難く受領し、政府コレクションに加える (1876.5.8)。

【公 (吉田)→ス (ヘンリー)】今月13日付の手紙とともに当公使館に送られてきた書類を受領した。8個とのことだったが、10個ある。すなわち、天皇への贈り物1、帝国大学5、アジア協会3、ドイツ協会1。これらの書類を日本に転送するが、誤りを避けるために数について食い違いがないか助言をお願いしたい。【付記：(10箱で正しい)】。Sigオフィスから受け取った2箱は帝国大学へ転送されたと報告されている。前の8箱は送付を待っている。1876.9.21] (1876.9.19)。

【公 (吉田)→ス (ヘンリー)】昨年9月13日付で、当公使館あてに送ってくださった日本向けの本の荷物を受領した。それらの宛先は、天皇1、帝国大学4、アジア協会2、ドイツ協会1である。適切な目的地に到着したことをお知らせする。開成学校 (帝国大学) に送られた本は、貴重な取得物として評価されている。ロックウェル氏に宛てられた1冊に関して、当大学で利用するようにと、彼によって同所に保管されているとのことである (1877.5.23)。

【公 (吉田)→ス (ベアード)】東京博物館、文部省博物館向けの博物学標本6箱の内容を明細に述べた今月15日付のあなたの手紙に関して、それらを受け取って、目的地に転送したことをお知らせする。この多くの興味深い標本は当政府の科学コレクションにとって重要な取得物になるであろう。日本がいただいた多くのご好意に対して、日本を代表し、スミソニアン・インスティテューションの代表にお礼申し上げたい (1877.6.18)。

【NY領 (高木)→ス (ヘンリー)】あなたが東京の文部省の博物館用にとっておいたコレクションを船便で転送するようにと文部省のデヴィッド・マレー博士から依頼された。横浜に向かう蒸気船ラドガ号があるので、そのコレク

ションをすぐに当領事館に日本への輸送に適した状態で転送してくだされば、ラドガ号に直ちに載せる (1877. 9. 7)。

【ス (ヘンリー)→NY領 (高木)】7日付のあなたの助言に関して、今日9日、日本向けの当インスティテューションの交換物を転送するように指示した。……お手許に届けば、ラドガ号に間に合う (1877. 9. 13)。

【公 (吉田)→ス (ベアード)】ノバスコティアの政府鉱山の監督者の性格および科学的能力に関する情報をいただきたい。彼の名前は定かではないが、彼は日本でノバスコティアの現在と同様の地位が提供される予定である。この紳士を個人的にご存知なくとも、あなたの公的な知人をとおして望まれる情報を入手しようと信じている。可及的速やかにお返事いただきたい (1878. 7. 13)。

【ス→公 (吉田)】7月13日付の手紙を受領した。ノバスコティアの政府の鉱山……についての十分な情報をあなたの活動のために入手したい (1878. 7. 17)。

【ス→公 (吉田)】ドーソン (Dawson) 教授からの2通目の手紙を同封する。彼は、プール (Poole) 氏の科学的資格に関する前回の手紙で私が言及した紳士である。判断するにあたり、ドーソン教授以上の適格者はいない。それゆえ、あなたが当該の任命をすることは正当化される (1878. 7. 27)。

【公 (吉田)→ス (ベアード)】常に十分なことをしていただいているので、あなたに追加の負担をかけるのは気が進まないが、そうせざるを得ない。「開拓使」は、同封の条件で「現在ノバスコティアの鉱山監督者ヘンリー・S・プール」氏の任務を確定するよう要望している。あなたのご好意によって彼の資格が確認されましたので、ある鉱山 (同封の書類参照) の監督として当政府に仕える職位を彼に提供したい。しかし彼は政府に雇われているので、公式に彼と交渉するのはデリケートな問題がある。それゆえ、政府や彼自身の利益を損ねることなく、彼が現在の職を辞めて他の政府のもので働く意志があるのかどうか確認するために、あなたから非公式に彼に連絡していただきたい。追伸：あなたのニュージャージー、アズベリーパークの住所を知らせていただきたい。プール氏が申し出を受け入れる場合、地図とともにベンジャミン・S・ライマン氏による「蝦夷の地質調査」報告書を調査用にお渡しする。「蝦夷の小さな地質地図」を同封する。終わったら返却してほしい (1878. 8. 5)。

【ス→公 (吉田)】ヘンリー・S・プール氏の手紙に関するあなたの要求にお答えできるとうれい (1878. 8. 8)。

【ス→公 (吉田)】プールの手紙を同封する…… (1878. 8. 24)。

【公 (吉田)→ス (ベアード)】プールの氏からのものを同封した今日24日付の手紙を受領した。この件に関しお心遣い感謝する。お忙しいとは思いますが、プール氏が却下した件について、蝦夷南西部の炭鉱の監督として日本に行く適確者を探すのを手伝っていただきたい。彼は、開拓使長官の指示のもとに活動することが期待されている。任期は最低3年、1月の補償は400円以内——アメリカのドルと等価である。さらに、日本往復はファーストクラスである。詳細は、プールの氏に関する手紙の中で渡した覚え書きを参照していただきたい (1878. 8. 28)。

【公 (吉田)→ス (ベアード)】17日付のプールの氏あなたの宛の手紙の写しが同封された今日21日付の手紙に感謝する。彼が提示された職位を却下した後は、ご承知のとおり、直ちに他の候補者を探さねばならない。この未決定の交渉がまとまるまで、プールの氏に関する提案に関して肯定的な決定を適切にすることはできない。この件に関する私の立場をあなたから彼に適切に説明していただけると信じ、また、まもなくあなたのニューヨークの友人から知らせがあると信じている (1878. 9. 23)。

【公 (吉田)→ス (ベアード)】Rothivell教授からの2通を同封した20日付の手紙を受領した。彼のヒューイット (Hewitt) 氏についての推薦状に好印象を受けた。想定される役職について彼に直ちに連絡をとる (1878. 10. 2)。

【ス (ベアード)→公 (吉田)】当インスティテューションが最近日本から受け取った彫物 (carved figures) の写真は何枚か同封する。ケプロン将軍を介してその絵の説明の翻訳をさせるというあなたのご好意に感謝する (1878. 10. 28)。

【ス (ベアード)→公 (吉田)】スミソニアン・インスティテューションは、その物体に関して何の指示もない同封の手紙を受け取った。日本沿岸の魚類のいくつかの種であり、日本の国立博物館によって合衆国の国立博物館に移送されたコレクションと関係があるかもしれない。最初のページを訳していただいて、持参人に返して頂きたい。また、科学名 [学名] に添えられた日本語はその種の地方の名称を示すかどうか教えて頂きたい (1878. 12. 7)。

【ス (ベアード)→公 (吉田)】今日22日付の手紙を受領した。その中には、当インスティテューションに日本の「魚類と鉱物」の標本を受領してほしいという日本の文部省大臣の手紙が同封されていた。これらの手紙に感謝すると同時に、文部大臣によって言及された6箱の標本を受領することをお伝えする。また、当インスティテューションの謝意をその寄付者に伝えていただきたい。合衆国国立博物館になされた寄付は、必ずやこの国の人々に評価されることを確信している。文部大臣によろしくお伝えいただきたい。また、我々の評価をご自身に受け留めていただきたい (1879. 1. 31)。

【ス (ベアード)→公 (吉田)】5月31日付の手紙を受領した。漁業委員会 (Commissioner of fish and fisheries) の報告書のご要望にお応えする。それらは、あなた宛に本日郵送する。近いうちに、鮭の缶詰製造に関してお望みの情報もお知らせする。お力になれることは、うれしい (1879. 6. 4)。

【ス (ベアード)→外務省】それぞれに同封された送り状のとおりの中身が入った科学交換の2箱No1515、1516を

送付することをお知らせする。ニューヨークの太平洋郵便汽船株式会社と、ニューヨーク、サンフランシスコの日本領事館にこの送付について指示した。この箱の内容物の配布の件、よろしく願います (1879. 12. 9)。

【ス (ベアード)→NY領事 (高木)】東京の外務大臣宛の科学交換の2ケースNo1515、1516をニューヨークの太平洋郵便汽船株式会社をとおして移送する。この送付についてサンフランシスコの日本領事と東京の外務大臣に知らせた (1879. 12. 9)。

【ス (ベアード)→SF領事 (柳井)】東京の外務大臣宛の交換の2ケースNo1515、1516を太平洋郵便汽船株式会社をとおしてニューヨークの領事館に送ることをお知らせする。お手許に届いたら、この箱の受領書をいただきたい。税関 [申告] としては、各箱100ドルの価値があるだろう (1879. 12. 9)。

【公 (吉田)→ス (ベアード)】東京府知事の依頼によって、スミソニアン・インスティテューション宛の彼の手紙をその翻訳とともに転送する。最近東京図書館に同インスティテューションから転送された本の受領に対する礼状である [同封の礼状は省略] (1880. 9. 8)。

【ス (ベアード)→公 (高平)】幾日前に、日本から1-2箱受け取った。2つの蜜蝋 [ママ] と40冊くらいの本が含まれていた。そのうちの1つは標本であった。公使館はこれの送付についての助言があるかどうか、またそのタイトル、特徴を教えていただきたい。当該の本は同じ大きさで、一般的特徴のようである。本の特徴を正確に理解するために、お手数をおかけするが、あなたか、他の公使館の方にスミソニアン・インスティテューションにお越しいただき、本を調べていただきたい (1883. 1. 24)。

【公 (スティーヴンズ)→ス (ベアード)】当公使館の鮫島氏が7日付で、日本の文部省のために同書で特定したある書類を入手できるかどうかを知りたいと要望した。再度伺うが、その書類を供給できるかどうか知りたい (1883. 5. 9)。

【ス (ベアード)→公 (スティーヴンズ)】鮫島氏が当インスティテューションに送ったとあなたが言われる5月7日付の手紙を探していたが、探せなかった。その手紙は、郵便事情かなにか……で紛れてしまったのかもしれない。もし鮫島氏が再び思い出せば、彼の望みに力を貸したい (1883. 6. 1)。

【ス (ベアード)→公 (スティーヴンズ)】6月12日付の手紙にお答えして、鮫島氏のご要望どおり、引き続きスミソニアンの出版物のシリーズを東京教育博物館 (東京帝国大学) に贈る (1883. 6. 15)。

【ス (ベアード)→公】日本政府が多様な種の図版を伴うヨーロッパの植物の大型本を出版し、その中で薬用、食用植物に関して特別な論及がなされたことを知った。スミソニアン・インスティテューションが担当する国立博物館に1冊贈っていただきたい。それは、……薬物部に役立つであろう (1883. 11. 21)。

【ス (ベアード)→公 (内藤)】今月21日付の私の手紙に対する迅速なお返事感謝する。日本の植物の著作や日本政府による出版物を国立博物館にもたらすという親切なお申し出に感謝の意を表す。あなたのお申し出の結果をお待ちする (1883. 11. 27)。

【ス (ベアード)→公 (鮫島)】3月7日付の手紙を受領した。同じ物を備え付ける限りにおいて、スミソニアン・レポートのシリーズの欠如分を供給する。1月に『コントリビューションズ』19-23を送ったので、「東京教育博物館」はあなたが求めた我々の出版物のうちこのシリーズを入手した。民族学報告2はまだ印刷していない。我々の出版物が「東京博物館」に評価されているのは喜ばしく、その施設にいくつかのシリーズを続けて送ることはうれしい。お望みどおり、「東京教育博物館」宛のものを公使館にお送りする (1884. 3. 15)。

【ス (ベアード)→公 (内藤)】3月31日付の手紙および「日本の植物」に関する大型本を受領した。当インスティテューションの図書館のためにこの著作を入手することができ、感謝する (1884. 4. 8)。

【ス (ベアード)→公 (内藤)】……博士に送ったが、本の到着より前に出発して受け取らなかった本の処分に関して、日本公使館の一人が国立博物館アシスタント・ディレクターに口頭要求した件であるが、スミソニアンを最近訪れた公使館の代表によって提案された貴国のインスティテューションのどこに配布しようとも異論はない (1884. 11. 10)。

【ス (ベアード)→公 (九鬼)】スミソニアン・インスティテューションおよび国立博物館の利便のために、備え付けに適する大きさの日本地図を確保するために援助願いたい。それは、合衆国国立博物館は今日日本から博物学の興味深い標本を多く受け取っており、それらがもたらされた地域を示すためである。日本の様々な教育・科学部門からの寄付、P. L. ジョニ (Jony) 氏のコレクション、トマス……大佐の贈り物などによって、日本の哺乳類、鳥類、ある程度の魚類のすばらしいシリーズを保有している。しかし、多くの場合、それらの地域がどこであるかを名前によって決定することができない。もちろん返報として力になりたい。これを機に、北米の動物を貴国のコレクションに追加するというあなたの前任者への申し出を更新する。鳥類、哺乳類、海洋無脊椎動物などを保管しており、ご希望があれば、寄付したい (1885. 3. 21)。

【ス (ベアード)→公 (九鬼)】3月25日付の手紙を受領した。あなたにお伝えした地図をお申し出いただき感謝する。もちろん、あるのならば、英語で地名が書かれているものが好ましい。あなたが備え付けられるどんな時でもいただく。お申し出いただいた物はうまく目的を果すであろう。来週火曜日の2時にお会いできればうれしい。不可抗力による障害がない限り、私はいる (1885. 3. 28)。

【公（九鬼）→ス】本状の持参人は、東京教育博物館S.手島氏である。彼は、英国からの帰国途中、こちらに寄った。彼は英国で健康〔衛生〕博覧会の日本委員の一人だった。彼が望む情報を与えていただきたい（1885.4.9）。

【ス（ベアード）→公（赤羽）】日本の文部省からスミソニアン・インスティテューションへ送られた18箱が到着したことを知らせる8月5日のメモを受領した。ご要望に従って、これらの箱を国立博物館の登録係に送るよう指示した。送付物の特徴に関する公使の手紙をお待ちしている（1885.8.10）。

【ス（ベアード）→公（赤羽）】8月5日のあなたのメモとともに、日本の文部省からの18箱を受領した。これらの箱に関する「正式な通知」は「日本公使がワシントンに戻り次第」なされるというあなたのお言葉に注目している。あなたがその箱の送り状を受け取っているかどうか知りたい。もしそうであれば、至急、オリジナルかコピーをいただきたい。日本の文部省による当インスティテューションへのこの贈り物への正式な礼状は後ほど出す（1885.8.18）。

【ス（リーズ）→公（九鬼）】「日本の農商務省」によって当インスティテューションに送られた18箱の中身のリストを受領した（1885.8.24）。

【公（九鬼）→ス（ベアード）】貴インスティテューションのJ・キング・グッドリッチ（Goodrich）氏は日本の英文学の教授職の応募書類を私に転送してきた。もしこの2、3週間閉じこもっていないければ、もっと早くお答えできただろう。個人的にその件を協議するために、あなたを訪ねることがいまなおできない。もう遅れるわけにはいかないので、今手紙を書く次第である。現在我が国の高校の一つが英文学の教師を必要としており、彼が適任であれば、彼にその職位を提供できるかもしれない。しかし同時に私は彼の人柄を全く知りませんので、我々の親密な間柄が頼みである。ご連絡をお待ちしている。彼の個人的資質に関して：どの大学で何を研究したのか、また、どのような条件で申し出を受けるのか。私の個人的な要望に応じて、情報をお知らせいただきたい（1886.1.13）。

【ス（ベアード）→公（九鬼）】日本の高等学校の1つの英文学教授職としてのJ.K.グッドリッチ氏の資格について照会された今月13日付の手紙にお答えして、情報をお伝えする。グッドリッチ氏はニューヘブーン、ホプキンスのラテン・グラマー・スクール、ニューヨーク、フランクリンのデラウェア文学インスティテュートで学んだそうである。後者の機関では1866年に中国へ行き、土木技師の学位を1年以内で取得した。彼はエール大学の……科学学校に入るため合衆国に留まる意向であった。数年間東洋に在る間に中国語を習得し、合衆国に戻り、土木技師の職につき、また、英語研究にも傾倒した。彼は4年前にエール大学の故ベンジャミン・シリマン（Benjamin Silliman）教授とともにワシントンを訪れた。シリマンはグッドリッチを非常に誉めていた。当時、グッドリッチがスミソニアン・インスティテューションの編集局にいた時、彼はよく任務した。エール大学の……ポーター（Porter）学長、ジョンズ・ホプキンス大学（ボルティモア）のギルマン（Gilman）学長はグッドリッチ氏を若い頃から知っており、その職位の適性と同様に彼の道徳的・社会的地位を保証する。私に関して言えば、その候補者は日本の高等学校の1つにおける教授職によく適していると考えられる。グッドリッチ氏は結婚しており、妻子がいる。合衆国の3000ドルと等価で、往復旅費を貴国政府に払ってもらえば喜んで行くだろう。あなたの病気が早くよくなりますよう、ご静養ください（1886.1.15）。

【公（九鬼）→ス（ベアード）】今月20日付の手紙を受領した。グッドリッチ氏の英文学の能力に関する情報に感謝する。あなたによる推薦状を信用する。大阪大学による詳細は以下のとおりである。年報2400銀円（詳細の総額は2400円であるが、3000銀円まで増やすよう努力する。しかし3000アメリカドルまで増やすのは不可能である）、1人分の旅費が支払われるが、家族のものは支払われない。雇用期間は2年、居住地は大阪。もしグッドリッチ氏が上記諸条件に同意すれば、契約のさらなる詳細をあなたかグッドリッチ氏に連絡し、早い機会に契約に入りたい（1886.1.25）。

【ス（ベアード）→公（九鬼）】グッドリッチ氏に関する1月25日付の手紙を受領した。本状の持参人である彼を紹介する。彼は我々の手紙の主題についてさらにあなたと協議するだろう（1886.1.27）。

【ス（ベアード）→公（九鬼）】スミソニアン・インスティテューションに現在保管されている日本の珍しい物のケブロンコレクションの価値に関して昨日話したことについて、提案なされた専門家による調査をして、その結果をお知らせいただければ、非常にありがたい（1886.3.1）。

【ス（ベアード）→公（九鬼）】東京の教育任務に就く2番目の任命に関して、昨日個人的になされたご要望を具体的にお知らせいただきたい。また、その仕事の本質、補償、任務の時期もお知らせいただきたい。私には、その職位に匹敵する人として1、2名思い当たる。博物学に関心があり、貴国の博物学の知識を確立する上で、よい仕事をするであろう（1886.3.1）。

【公（九鬼）→ス（ベアード）】今月1日のご好意〔手紙〕に感謝する。日本の珍しい物のケブロンコレクションの調査に関して、ここには芸術分野を専門とする日本人はいないが、日本の珍しい物を理解する友人を訪ねてみる。彼がその件に関してなにか示唆してくれることを願う。日本の教育行政の2番目の紳士に関して、あなたのご要望に答えて、以下の通り書く。1. 英文学を教えること。2. 補償は1月200日本銀円（2000円）。3. 教師は来る9月10日まで〔ママ〕学校に出る必要がある。この条件の下、これから応募する経歴に匹敵するほどの学力および道徳的資質をもつ紳士を探していただきたい（1886.3.3）。

【ス (ベアード)→公 (九鬼)】ケブロンコレクションの硬貨の価値を定める3月7日付の手紙を受領した。これで容易に全体の価値を推定することができる。追伸：ご依頼の日本での教師の職について、2、3人からの応募書類を持っている。まもなく明確なものを送ることができると思う。学校での任務は9月10日に始まり、東京かどこかであると考えてよいか (1886.3.8)。

【公 (九鬼)→ス (ベアード)】任務の時期と学校の所在地を照会する今月8日付のお手紙を受領した。任務は9月10日に始まり、グッドリッチ氏の勤務場所は大阪にある東京大学の分校である。該当の教師に示された契約条件の写しを同封する [同封の協定書は省略] (1886.3.9)。

【ス (ベアード)→公 (九鬼)】同封の3月9日付手紙を受領した。大阪の文学の教職に関連して、日本政府代表とヒッチコック教授との間の「合意書」(案)はあなたの手紙とともにヒッチコック教授に照会される (1886.3.12)。

【ス (ベアード)→公 (九鬼)】本状の持参人R. ヒッチコック氏を紹介する。彼は現在国立博物館の織物担当学芸員である。彼は、彼が望んでいる大坂の教職に匹敵すると私は推薦する。ヒッチコック氏は英語学概論だけでなく、その多様な分野を教える能力がある。彼は、科学に関心があり、研究において訓練を受け、とりわけ顕微鏡およびその応用に知悉している。アメリカン・ジャーナル・オブ・マイクロスコピィ [顕微鏡法] の編集をしている。その分野の彼の努力が日本に移入されれば、貴国の科学者は歓迎するであろう。追伸：万一、ヒッチコック氏と合意に至らない場合、だれか他の人を任命するつもりである (1886.3.12)。

【ス (ベアード)→公 (九鬼)】同封の標本を鉱物学者に検査させた。緑のガラスピンの破片で、浜で摩擦によって壊れたものだろうとのことである (1886.4.9)。

【公 (九鬼)→ス (ベアード)】今月9日の手紙に同封して返送された標本を受領した。調査に感謝する (1886.4.12)。

【ス (ベアード)→NY総領事 (吉田じろう)】8月20日付の手紙を正しく受け取った。太平洋郵便汽船会社はスミソニアン・インスティテューションの交換の移送について同所への長い間築いてきた寛大なポリシーを継続することをお知らせする。その船が行く港へは無料である。従って、日本向けの荷物についてのご希望が当インスティテューションの交換部によって遂行されるように指示した (1886 (?).9.2)。

【ス (ベアード)→NY総領事 (吉田じろう)】9月15日付の手紙へのお答えとして、我々の交換の記録によれば次のとおりである。1) 4月16日にパテント・オフィスから受け取った9つの荷物はニューヨークの総領事と東京の外務大臣を通じて4月26日に転送された。2) 6月2日、7月2日に受け取った物は同経路で8月3日に転送された。3) 8月28日に受け取った物はまだ当方にある (1886 (?).9.23)。

【ス (ベアード)→NY総領事 (吉田じろう)】9月15日付の手紙に同封されていた手紙を返却しなくて申し訳なかった。今回同封する (1886 (?).9.29)。

【公 (九鬼)→ス (ベアード)】先日の会話の件に関する今月23日付の手紙を受領した。変わらぬご好意に感謝する (1886.11.27)。

【ス (ベアード)→公】あなたが数日前スミソニアン・インスティテューションにいらした時、日本の海に出現する珍しいサメはいわゆる「ウミヘビ」のことではないかと私は話した。私はできればその描写を入手すると約束した。マサチューセッツ、ケンブリッジの比較動物学博物館の魚類学芸員ガーマン (Garman) 氏に手紙を書いた。そこではこの標本が保存されており、その外観を示す描写の写しを同封する。もしこれが適切と考えれば、日本の適切な部署へ送り、正確な外観の描写を依頼していただきたい。その一部を我々が保有できればうれしい (1886.11.29)。

【ス (ベアード)→外務大臣】同封の船荷証券は以下のとおりである。1つはスミソニアンの種々の科学交換No196の1箱であり、もう1つは合衆国政府書類No1122の1箱である。これらの箱は、それぞれ無料の太平洋郵便汽船会社のアカブルコ号によって移送される。それぞれ11月11日、16日に通知した (1886 (?).11.29)。

【ス (ベアード)→公 (九鬼)】最近の手紙でご要望のあった日本のサメに関する2番目の論文を送る。あなたがご使用なさるため、著者のガーマン氏から即座に入手したものである (1886.12.10)。

【公 (九鬼)→ス (ベアード)】本状の持参人渡瀬氏は、日本のコロニアル・ビューローの主任によって任命された役人であり、現在ジョンズ・ホプキンス大学にいる。貴インスティテューションで調査・研究するために、便宜を図っていただけるとありがたい (1887.4.13)。

【ス (ベアード)→公 (九鬼) →】スミソニアン・インスティテューションは本状の持参人日本帝国の駐米特命全権公使九鬼隆一氏を紹介する。彼はニューヨークの美術コレクションの視察を望んでおり、私は彼にそれらの保管人や所有者を推薦した (1887.4.20)。

資料3 ランマンとスミソニアン・インスティテューションとの間の書簡授受一覧^(註)

(資料中の【ラ→ス】、【ス→ラ】は書簡の宛先を示す。()内は差出人・受取人の名)

【ラ→ス】同封の森氏からの小切手はあなたが公使館に送った教科書の運賃である。この件に関するあなたのご厚意に森氏が感謝していることは言うまでもない(1872.5.20)。

【ラ→ス(ヘンリー)】費用を示す伝票の入った3月27日付のあなたの手紙が誤って日本に転送されてしまったことをお知らせするよう、森氏に指示された。しかし、費用は数週間前に支払われ、取り引きは終了している(1872.6.30)。

【ラ→ス(リーズ)】昨日、貴オフィスの男性が、ヘンリー教授はワシントンをつつ前夜に森氏に手紙を送ったと言った。その手紙をまだ受領していない。郵便局の抜けた人があなたの方の手紙を2通も日本に誤送してしまった。我々は現在紛失中の手紙を探さねばならない……(1872.7.31)。

【ラ→ス(ヘンリー)】……森氏が先日の晩私に会いに来て夜中までいた。彼の宗教に関する論文はまもなく日本に送られ、教育に関する著作ももうすぐ印刷される。彼は自分の後任に関する政府の……について遺憾のようだ(1872.11.29)。

【ラ→ス(ベアード)】日本向けの政府の本はどのような具合か。矢野氏はその件に関して公式な知らせを受け、日本へ送るための準備を進めることができれば喜ぶであろう(1874.2.20)。

【ラ→ス(ベアード)】日本の学者と金星に関する手紙にお応えして、矢野氏はあなたの関心に十分に感謝しているが、その機会を利用したい学生を一人も知らない。彼はすでに同じ事をニューコム教授に言った(1874.5.30)。

【ラ→ス(ベアード)】昨日のあなたのメモにお答えして、最近の郵便規定に則り、この国で規定の郵便料金が支払われていれば、手紙でも本でも日本で料金は請求されない。新しい大臣の吉田氏は非常に優秀であり、彼とあなたは互いに好意を持つであろう。彼を訪ねてみるとよいだろう……(1875.2.3)。

【ラ→ス(ベアード)】あなたが日本公使館に送った本をまだ受領していないことを非公式にお伝えする。それらは、紛失することができないほど日本人にとって良いものである……(1875.4.27)。

【ラ→ス(リーズ)】大臣[吉田]が12月2日付の手紙の返事を待っている。ご所望の絵(写真)を同封する(1875.12.23)。

【ラ→ス(ヘンリー)】今月21日付のあなたのお手紙に関して、次のように言うよう日本の大臣から指示された。スミソニアン・インスティテューションの出版物をはじめとして、日本の学術協会向けのどのような荷物も日本公使館の郵便袋に転送していただきたいとのことである。[付記：チャールズ・ランマン氏はスミソニアン・インスティテューション交換物を日本へ転送することを約束。1876.7.29に注意](1876.7.25)。

【ラ→ス(ベアード)】興味深い漁業についての第3巻に感謝する。大臣にも1冊送って下さり、彼がとても喜んでおりましたこと、私が代わってお礼申し上げる。ご承知のとおり、今日、日本人は漁業に従事しており、吉田氏は政府に送るために3巻を2冊受領すれば喜ぶだろう。無理でなければ、1、2巻も2冊ずつ、分けていただきたい(1877.6.5)。

【ラ→ス(リーズ)】日本向けの本の箱を以下のとおり印をつけて、持参人に渡していただきたい。日本、東京、外務大臣へ。カリフォルニア、サンフランシスコの日本領事気付。[添付書類は省略](1877.6.29)。

【ラ→ス(リーズ)】先月8月28日、吉田氏はベアード教授あてに、炭鉱監督者に関して手紙を書いた。彼は、まだその人について何も聞いていない。それはアズベリーパークからワシントンに送られた。それを受け取ったかどうか教えていただきたい(1878.9.17)。

【ラ→ス(ベアード)】先月28日吉田氏があなたにプール氏の代わりに新しい人を示すよう依頼する手紙を送った。彼は返事を受け取っていないので、おそらくその手紙は誤送されたのであろう。日本の役人はこの件に関して急いでいる。そのため、吉田氏の指示によって、このメモをあなたに置いていく。もし特別な人を思い付かなければ、以前合衆国の任務をしており、現在はコーネル大学の地質学の教授であるT. B. Comstock教授についてお知らせいただきたい。彼の名前は昨日技術局(Bureau of Engineers)で聞いた(1878.9.19)。

【ス(ベアード)→ラ】サンフランシスコのアラスカ商社に、日本の物品の箱を太平洋郵便SS会社に照会するよう助言された。我々が探すことができるように、ニューヨークで前払いされた船荷証券……(1878.12.24)。

【ス(ベアード)→ラ】数日前に照会のあった6箱を当インスティテューションは受領した(1879.1.21)。

【ス(ベアード)→ラ】我々は9、10月にアトランタで開催される万国綿業博覧会の推進者であり、……その際に日本の綿コレクションに関する……。もし貴政府が親切にも私の希望を聞き入れてくれるならば、当局の国立博物館のあらゆる状態の原材料の綿を示すサンプルコレクションを始めるのに役立つだろうと思ふ。生なり・染めの綿糸、綿製品。もちろんこれらの標本は博覧会終了時に当インスティテューションによって利用され、日本の特別展として引き続き展示されるだろう(1881.5.4(?))。

【ス(ベアード)→ラ】日本のキャトルフィッシュを受領した。それは珍しい種であり、日本からの食用魚のコレクションに追加できることを感謝している。それらは大臣かどなたか別の方に対して謝辞を付すべきか(1881.5.11)。

【ラ→ス(ベアード)】アトランタ博覧会がいつ終了し、また、鉄道でその町まで行くのにどれくらいかかるのかを知らせていただきたい。ご迷惑でなければ至急お返事いただきたい(1881.11.5)。

(註) 公務に関するものに限って掲載